

基調講演

「日本のモデルになろう 伊豆市の未来宣言」

大坪 壇 静岡産業大学 総合研究所 所長



私は長く産業界にいて、静岡県立大学が設立されるときに経営情報学部教授に迎えられて静岡にきました。当時の斉藤知事や石川知事に依頼されて伊豆新世紀創造祭や伊豆地域の市町村合併に関わるなど、これまで伊豆地域について数多くの議論を進めてきたつもりですが、実際には何も進んでいないというのが私の実感です。その中で今回「未来づくりセッション」の座長を引き受けたのは、本気になって取り組むと市長が熱意ある説明をされたからです。皆さんが本気になる、そしてたとえうまくいなくても文句を言わない、今回は最後というお約束で座長を引き受けた次第です。

伊豆市の現状と問題

まずは伊豆市の現状と問題についてパワーポイント資料を参照しながら説明します。

静岡県と各市町が抱える大きな問題が急速に進む人口減少で、「静岡県 3 大ショック」のひとつといわれています。この人口減少は 20 年も前から指摘されてきたことですが、伊豆市でもこの人口減少が大きな問題になっています。伊豆市の人口は、平成 21 年度は 3 万 6 千人でしたが、平成 26 年度には 3 万 3 千人になって、今後さらにどんどん減っていくことが予想されています。次に年齢階層別人口をみると、高齢者の割合が増えていることがわかります。私は高齢者が増えることは悪いことではないと考えていて、高齢者は老年と捉えるのではなく「長寿者」と考えるよう助言しています。長寿者にも健康な人とそうでない人がいますが、特に健康な長寿者はよい現象だといえるのです。その一方で医療費と扶助費が今後増えることが確実視されますから、財政的にはきわめて厳しくなるという問題があります。次の将来人口推計では伊豆市の人口は 2040 年には 2 万人になると予想され、これは現在の下田市と同程度の人口規模です。私は人口 2 万では市とはいえないと考えていますが、この 2 万という推計値でも楽観的な数値です。私が住んでいる神奈川県葉山町は人口 3 万 3 千人ですが、市ではなく町のままです。そのことから考えると人口が少ない自治体は市ではなく町という行政単位だといえます。企業ならば売上げが減れば社長や社員はクビになります。行政はそうはならないと考えている人も多いかもしれませんが、自治体が消滅することもあり得る厳しい状況が現実味を帯びてきました。人口がどんどん減って町が消滅する、こうした事態を私は「夕張化現象」と呼んでいます。

産業別に産業人口を示したグラフからわかるのは、伊豆市では第一次、第二次、第三次のどの産業区分でも仕事が減っていて、就労人口が減少していることです。就労人口の減少は税金を払う人が減っていることになり、税金を支払う能力が低下していることを意味します。静岡県 3 大ショックの一つが所得の減少で、15 年くらい前には 20 兆円ほどあった県の経済価値(県内 GDP)はリーマンショック後の 5 年ほどの間に 5 兆円も減少し、この所得の減少が今も続いているのです。たくさんモノを作って売るのが製造業ですが「貧すれば鈍する」のが現実です。私は

以前からモノづくりをやめて価値をつくることにかえるよう警告してきましたが、残念ながらこれは実現していません。

伊豆市の農業では、副業的農家の減少はいい傾向だと私は考えています。それは競争相手が少なくなっているからです。私は、農業は「農家の業」から脱皮し、農業ビジネスに転換すべきと思っていますが、アベノミクスの中でやりがいがある最大の成長産業が農業ビジネスです。大きな利益を生み出して税金を払うことで社会貢献する、これが農業ビジネスです。

日本政府が観光に力を入れるようになって海外からの観光客が増えていることもあって日本全体では観光客が増えています。現在もっとも集客力があるのは東京ディズニーランドで、リピーターが多いのが特徴です。ところが伊豆では観光客は増えていません。平成 24 年度あたりからわずかながら回復基調もみえますが、それも不確かなものです。以前は何もしなくても観光客が伊豆に来てくれたので、のんびりと構えていたら観光客が減りはじめて人が来てくれなくなってしまい、しかも伊豆ではお金を落としていってくれなくなってしまっています。伊豆半島には昔から素晴らしい観光産業があってそれで成り立ってきたのに、受け入れる側の意識も手法も変わらないのが観光客減少の原因ではないでしょうか。

私はこのセッションではっきり指摘するために本日、修善寺駅から市役所まで歩いてきましたが、観光の衰退を肌で感じてきました。新しい駅舎が完成した一番大事な時期なのに 8 月にならないと駅に観光案内所ができない。修善寺の観光地図は日本一小さな地図ではないかと思うくらい小さな案内図で、これではたくさん訪れてくれる高齢者が読むことはできません。駅前の商店も日曜日にもかかわらず店員がなかなか出てきてくれませんでした。これではやる気があるようには見えませんし、お客さんのことを考えないようでは閑古鳥が鳴くだけです。三島から修善寺の伊豆箱根鉄道はきれいで車窓からの眺めもよいのですが乗客がほとんどいませんでした。御殿場アウトレットモールでは他県ナンバーの車がたくさん並んで人々は買い物していますが、修善寺駅周辺では伊豆ナンバーが目立っていました。多くの人は他人のせいにして、景気を理由にしてしていますが、自分たちの問題であると強く認識しなくてはなりません。

次に伊豆市の市民所得で、市民所得が大きく減っていることも問題です。1 人あたり所得は平成 8 年度の 300 万円から平成 22 年度には 240 万円に減少し、この間 60 万円も減ったことがわかります。このように伊豆や静岡の人は貧しくなっているのですが東京では所得はもっと多いので、格差が明らかに生まれているのです。格差が生まれてしまったのでは、静岡の子どもは親の収入が少ないために大学に行けない、十分な教育が受けられない、という問題が発展します。戦後日本の発展の源泉は教育にありましたが、このまま何もしなければ十分な教育が受けられなくなり、結果として未来がなくなってしまうと警告しておきます。

次に伊豆市の財政についてお話しします。伊豆市の財政は現時点では他の自治体と比べて特に悪いというほどではありませんが、この状況は数年後には大きく変わります。まずは歳入で、その構造は市税のほとんどが固定資産税と市民税であることがわかります。固定資産税については、土地価格は伊豆地域では年率 5% くらいで下がると予想していますので、税収は減少していきます。市民税は、市民所得が減少を続けているのでこれも減少です。このほかに国からの地方交付税がありますが、今後は交付税も減少します。このように市の歳入は右肩下がりで減少が進むのです。次に歳出です。年金は国が負担するものですが、市が負担する義務的経費には、医療費、介護費、社会保障費、所得が少ない人を援助する扶助費などがあります。これらの歳出は今後確実に増えていきます。したがって歳入と歳出の見通しでは平成 30 年には伊豆市の財

政は赤字に転落することが予想されていて、あと数年で平静ではいられなくなる厳しい状況なのです。伊豆半島の他の市町も同じような問題を抱えています。伊豆市も北海道夕張市と同じような事態に陥りかねない厳しい状況です。これを乗り越えていくには本気になって取り組むしかありません。

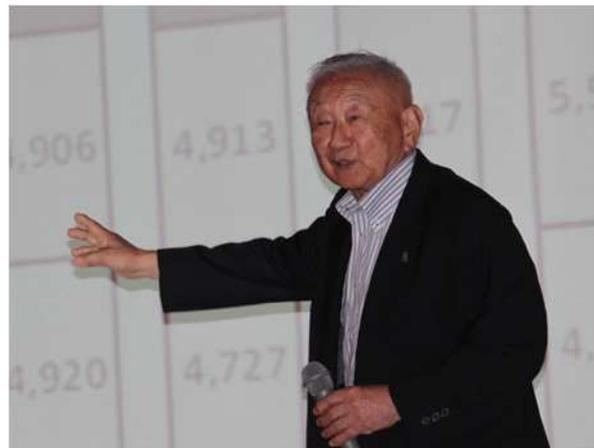
静岡県 3 大ショックと社会の変化

先に指摘した静岡県 3 大ショックは、GDP ショック(所得の減少)、人口の減少、教育の低下です。GDP ショックは産業構造を変えなかったためにモノづくり県が崩壊しそうになっている問題です。

静岡県から人口流出が進んでいるのが人口ショックで、高校卒業者の 25%くらいしか静岡県に残らないという大きな問題を抱えています。親が一生懸命働いても所得が増えないのに、それでも頑張って子どもを東京に出して年間 100~200 万円もの高額な学費を大学に支払って、年間 150 万円もの生活費を送りしています。静岡で使えるはずのお金を東京に送金しているのに多くの若者が静岡に戻ってこないのが現実です。この問題は伊豆市にもあてはまりますが、産業もなく、魅力ある職場もない、若者がとどまる魅力の原点がないために若者が戻ってこないのではないのでしょうか。この問題は難しく簡単には解決しないのですが、若者が戻ってくるような魅力ある産業が必要だといえるでしょう。それは観光産業か、あるいは他の産業かもしれないのですが、新しい産業の創出が必要なことは確かだと思います。

3 番目の教育ショックは全国統一テストで一部の結果が全国最下位だったことですが、この点については、私はそれほど気にしていません。静岡県 3 大ショックでは、人口減少と経済価値の低下の問題が大きいと私自身は考えています。

こうした社会の大きな変化は 70-80 年に一度くらいの割合で起きると考えられます。近代の大きな変化にはペリー来航による明治維新と終戦があって、この 2 つは目に見える変化でした。ところが現代の変化は目に見えないのです。情報、インターネットによる社会変化なので見えにくいのですが、ものすごいスピードで社会が大きく変化する激動期になりました。激動期には、長いものを短い、短いものを長い、というくらいの大きな発想の転換が必要です。私は県庁で静岡空港の検討会に参加していて、検討会では空港や飛行場ではなく静岡空港は文明の利器であると位置づけるよう提唱しています。静岡産業大学(静産大)では英語ネイティブの先生のところに小学生が英語を勉強しにきていますから、大学は高校卒業した人だけに来るところではなくなりました。こうした大胆な発想の転換が不可欠です。変化が大きい時代には変化できないものは滅びる、ダーウィンの理論です。激動期はチャンス到来だと考えることもできますが、こうした乱世で必要なのは「発想の転換」なのです。



現代を見つめなおす

次が現代をもう一度よく見つめなおすことです。現代では人々は長生きするようになりましたが、多くの人は老年ではなく健康な長寿者です。県の組織改革で高齢者政策課に名称変更しようとしたときに、私は知事にこれからは健康で長寿な人をつくっていくことが重要なので長寿政策課にするよう助言しました。行政は高齢者対策と言い、マスコミは具合の悪い高齢者ばかり映像で流すのですが、私のように元気な長寿者もたくさんいるのです。研究し環境を改善して病気を治療できるようになって日本人は長生きするようになりました。健康で長寿な日本人は世界一恵まれた国民です。とりわけ静岡県は健康長寿県だということをもっと強調した方がいいでしょう。

人口減少も決して悪いことではありません。中国やインドなどでは人口が増え過ぎて困っています。戦前に日本の人口が 7500 万人になって当時としては人口が増え過ぎたために他の国に攻めていきましたが、最近の中国はこれと同じような状況で人口が多いためにエネルギーが必要になって南沙諸島などに進出しているのです。これに対して、北欧諸国はどの国も人口が少なくても繁栄しています。要は人口減少が問題なのではなく、やり方を変えない、古い手法のままにしているのが問題なのです。

次に指摘できるのがモノあまり現象です。大学の学生が欲しいものの多くはモノではなくなりしました。今の学生は、医師免許が欲しい、北京の大学院へ留学したいといったことを望んでいて、欲しいのはモノではなくなりました。高齢者であれば修善寺の高級旅館に泊まってみたいと言うかもしれません。中国から帰国した学生が中国では風呂もなく、トイレも汲み取り式で、そこに大勢の人が住んでいると報告してくれます。これは海外からの観光客によく指摘されることですが、風呂はもちろん日本はどこへいってもウオッシュレットがあります。ごみもありません。所得は減少したものの日本は他国と比較して世界一裕福な国になりました。日本の普通世帯は中国では富裕層にあたります。弱い立場の人を見ることが多いのが行政なので市役所では実感しづらいかもかもしれませんが、日本は確実に豊かになったのです。

情報化の進展が速いことも指摘しておきましょう。タブレットや携帯端末などの情報機器を持つ人も多くなって社会の変化が急速に進行しています。大学の授業ではインターネットで検索した学生から間違いを訂正するよう指摘されてしまうこともあるくらいです。インターネット上には見切れないほどの膨大な量の情報が掲載されています。こうした状況ですから、静産大でも億単位の資金を投じて認知度を上げようとしていますなかなか上がりません。伊豆半島の情報をいくら情報発信してもその効果は見えにくく、認知度が上がらない、あるいは低いと感じてしまうのです。これだけ情報が多いと人間は記憶することができませんから、情報は検索で探すものになりました。こうした情報の変化のほかには、グローバル化の進展があり、このほか教育水準が高くなって人々が賢くなったことも指摘しておきます。こうした変化が社会大転換を起こすのです。

一方、この間に起こった現象を私なりにまとめると、日本人が社会保障に依存し過ぎるようになったことをあげておきます。社会保障を充実し困っている人を助けるのは当然で、極めて重要ですが、反面、過度に頼る依存型の日本人を生み出すようになってもいます。これは民主主義の悪影響ともいえるかもしれません。大したことがないのにすぐに救急車を呼ぶ人も多く、これにも税金がかかっています。私は健康が重要だと考えていますから、大学では喫煙者は採用しないことにしています。たばこを吸う人に対してどれほどの税金を負担しているか、健康な人を少しでも多くしていかなければ国家が持たないからです。自分のことは自分するのが基本であるにも

かわらず、今や権利は主張するが義務は放棄する時代になってしまいました。個人中心の社会で、これは教育や政治のあり方と関係します。私は自由と民主主義が重要だと考えますが、人に依存しない、自分のことはできるだけ自分でする、このことも重要でしょう。

小さいことの利点と団結力を活かす

静産大は無借金経営で、補助金の占める割合は9%しかなく、外部からの資金に頼らない健全経営を進めています。伊豆市には今後10年計画で補助金に頼らない、自分で稼ぐ、自分のことは自分でする方式に変えて依存型から脱出する必要があります。夕張市は人口10万でしたが炭鉱の閉山によって今では1万人になってしまいました。大きいところが急激に小さくなるとつぶれるのですが、中小企業はやり方によっては大企業に成長することもできるのです。

小さくてもよい町は世界でもたくさんあります。人口4万のモナコ、500万のシンガポールなどです。シンガポールは静岡と同程度の人口規模ですがシンガポールの首相は安倍首相と対等に渡り合っています。また終戦時に日本がモデルにしたスイスは人口約800万と小さい国ですが、世界一豊かな国で世界から尊敬を集めています。小さいが変わった大学ということで静産大では財務省などからたくさんの方の視察を受けます。小さいことは決して悪いことではありません。

私が伊豆市に対して提唱したいのは「日本のモデルになる、伊豆市の未来宣言」をすることです。他のまねではなく、自ら目標を立てて未来構築する。個別ではいい取り組みであっても、全体で見るとうまくいかないことも多いので、人口も所得も減少していると考えられることもできます。決まるまでは民主主義で、アイデアを出して知恵を出して議論しますが、一度決まったらそれを守って一丸となって皆が参画して進めることです。これからの市に必要なのは、まとまりと団結で、評論ではなく「実行」です。市民のアイデア、独立意識を持って、団結して、皆がそれぞれ取り組むことで変わることができるのです。

最後に伊豆の魅力について考えてみましょう。暮らし、産業、雇用、所得、文化、教育などの観点で未来を考えてはいかがでしょうか。この町(修善寺)には物語がありますし、こんな素晴らしい有名な地名はそうはありません。そこで提案です。外国の道路には名前があるのですが日本の道路には名前がないことを私は常々感じていて、修善寺の道や横丁に「さくら通り」といった花の名前をつけるのもいいのではないのでしょうか。これができる日本では最初の取り組みになりますから日本中からマスコミが取材に来ることでしょう。花がある街に人々は感動します。感動すると価値が生まれます。人々はハッピーになりたくて町にやってきますから、寄席もできるかもしれません。自分たちの町なのだから自分たちで取り組まなくてはなりません。

伊豆市が人口3万だからといって出来ないことはありません。人口3万だからこそ、できることがあります。ここ伊豆の地から天下をとった源頼朝もいます。静岡県では鍛冶屋だった本田宗一郎がいます。日本のモデルになるよう、発想をかえ、しくみをかえ、やり方を変えて取り組んでください。やる気、根気、負けん気で日本一に向けて着実に進めてほしいと考えています。